——ヨハンナ・スピリ原作——

ハイディ（第十一回）

津田芳雄譯

ハイディはすぐにやつて來た。おばあさまが繪を見せてやると、目を丸くして喜び、一心に見つめてゐたが、ページをめくつて行くうちに、突然叫び聲をあげて、見る見る大粒の涙を落し、やがてはげしくしやくり上げて來た。おばあさまがその繪を見ると、青々とした牧場に、たくさんの小羊たちがのびのびと草を食べてゐる繪であつた。まん中には一人の羊飼ひが、杖にもたれながら、この樂しさうな羊の群れをながめてゐた。太陽は地平の彼方に沈みかゝり、金いろの光りがあたり一面にさんさんと照りそそいでゐた。

おばあさまはやさしくハイディの手を撫でながら、

「おおよしよし、泣くんぢやありませんよ。繪を見て何か思ひ出したのですね。この繪には美しいお話がついてゐるのですよ。晩にはそのお話をして上げませうね。そのほかにも、まだぢつさり面白いお話があるのですよ。さあ、こちらへいらつしやい、二人で少しお話をしませう、——ほら、もう泣き止みましたね」

けれどもハイディはしばらくはどうしても泣き止めることが出來なかつた。おばあさまは時々、「さあ、いゝ子だからもう泣きませんね」となぐさめながらも、やさしく泣きたいだけ泣かせてやり、やつとハイディが鎮まつて來た時に云つた。

「お勉强はどんな工合ですか。おけいこは好きですか。澤山進みましたか」

「いゝえ、わたし、おけいこなんかしたつて、覺えられないつてこと、前からわかつてゐたのですわ」

ハイディは溜め息をついた。
「何が覺えられないのですつて？」
「讀み方ですわ。むづかしすぎるのですもの」
「それはあなたが考へたことぢやないでせう？誰がそんなこと云つたのです」
「ペーテルが云つたのですから、ほんたうですわ。ペーテルは自分で何度も何度もやつて見たけれど、どうしても駄目だつたのですもの」
「それではペーテルつて、よほどへんな子供なんですね。よござんすか、ハイディ。なにもペーテルが云つたからつて、その通りに思ひ込まなくてもいゝのですよ。自分でやつて見なければなりません。あなたは先生が字を教へて下さる時、一生懸命に聞いてゐなかつたのでせう」
「聞いてたつて駄目ですわ」
ハイディは諦め切つたやうに云つた。
「よくお聞きなさいよ、あなたはね、今までペーテルの云つたことばかりを信じ込んでゐたから、それで覺えられなかつたのですよ、これからは、わたしの云ふことを信じて下さい。いゝですか――あなたは必ず、ぢきに讀むことが出來るやうになります。ほかの子供はみんな出來るのですよ。ペーテルは、特別覺えがわるいのです。さつきあなたは羊や羊飼ひのゐる繪を見ましたね。あの御本は、あなたが字が讀めるやうになつたら、あなたにあげませう。そしたら、その中の山羊や羊や羊飼ひの面白いお話が、まるでひとにお話してもらつたのとおんなじに、なにもかもわかるのですよ。面白いでせう？あなたはお話、すきでせう？」
ハイディは一心におばあさまのお話に聞き入つてゐたが、この時溜め息をついて叫んだ。
「ああ、今讀めたら、どんなにいゝでせう」
「もう大丈夫、ぢき讀めるやうになりますよ、さあクララのところへ行きませう。御本も持つていらつしやい」
二人は手をつないでクララのお部屋へ降りて行つた。
ハイディは家に歸りたくつてたまらなくなつたあの日、ロッテンマイアさんにお玄關で見付かつて、逃げて歸るなんてなんといふ恩知らずだ、且那樣のお耳に這入らなかつたのがせめてもの幸ひだ、と叱られた時から考へが變つて來た。その時初めてハイディには、自分はデーテ叔母さんが云つたやうに歸りたくなればいつ歸つてもいゝので

はなくて、いつまでもいつまでも、もしかしたら永久に、フランクフルトにゐなければならないのだといふことがわかつた。それからまた、自分が歸りたいなどといふ心を起したなら、クララもクララのお父さまもおばあさまも、みんな自分を恩知らずだと思ふのだといふこともわかつた。それで、どんなに歸りたくつても、誰にもそれを打ち明けることが出來なかつた。あの大すきなやさしいおばあさまにはなほさらのこと、そんなことは死んだつて云へない氣がした。小さな心一つに悲しみの重荷はたへかねて、もはや食物ものを通らず、ハイディは日に日に青ざめて行くのだつた。

夜、一人きりになつて、あたりがしんと靜まつて來ると、きまつてお日樣の輝く花の咲き亂れた山の樣子が目の前にまざまざと浮んで來て、いつまでも眠れなかつた。やつとうとうとしたかと思ふと、今度は夢に、夕陽に眞赤に照り映える岩や雪の野原があらはれるのだつた。そして朝目が覺めて、山の小屋に歸つて來てゐるやうな氣がして、大よろこびでお日樣の光りの中へ跳び出さうとすると、——ああ、そこには大きなベッドがあり、ここは遠い遠いフランクフルトなのだつた！ハイディは枕に顏をおしあてて、誰にも聞えないやうに、長いこと泣いてゐることがよくあつた。

ハイディのこの悲しさうな樣子が、おばあさまの目に留まらない筈がなかつた。二三日も經てば又元氣になり、しほれた樣子もなくなるかと樣子を見てゐたが、一向よくならず。今まで泣いてゐたに違ひない顏をして降りて來る朝が、いく朝も續くので、おばあさまはある日ハイディを又自分の部屋に呼んで、抱きよせながら云つた。

「ハイディちやん、どうしたの。わたしにお話してごらんなさい。なにか心配ごとでもおありなの？」

でもハイディは、もし本當のことをいへば、おばあさまが恩知らずだと思つて、もうこんなに親切にして下さらなくなるかと心配して、

「云へないのです」

と答へた。

「ぢや、クララになら云へますか」

「いゝえ、わたし、誰にも云へないのです」

「きつぱりと、しかも悲しさを一ぱいにためた顏で答へる子供を見てゐると、おばあさまはいぢらしくてたまらなかつた。

それではね、いいことを教へてあげませう。悲しいことがあつて、しかもそれを誰にも云へない時には、神樣にお祈りして助けていただくのですよ。神樣はどんな悲しいことでも、みんなとり除けて下さることがお出來になるのですからね。わかりましたね。毎朝あなたは、神樣がして下さつたことにお禮を申し上げ、それからわるいことをしない樣にお守り下さいましつて、お祈りしてるでせう?」

「いゝえお祈りなんかしませんわ」

「まあ、お祈りも教はらないのですか。それぢや、お祈りつてどういふことだかも、知らないのでせうね」

「もうせん、おばあさんとゐた時、一緒にお祈りしてましたけど、ずうつと前だから、もう忘れてしまひましたわ」

「ああそれだからなのですよ、ハイディあなたが誰も助けてくれる人がないと思つてそんなに悲しい氣持になるのは。どんなに悲しくて心のしづむ時でも、わたし達はいつでも神樣のところへ行つて、何もかも申し上げてお祈りすることが出來るのだと思つたら、氣が晴れ晴れとするでせう。神樣はわたし達を救ひ、わたし達をすつかり仕合せにして下さることがお出來になるのですからね」

突然ハイディはうれしさうに眼を輝かした。

「神樣になら、どんなことでも、すつかりお話してもいいのですか」

「ええ、いいのですとも、ハイディ、どんなことでも、すつかりね」

ハイディはおばあさまにやさしく握られてゐた手をひつ込めると、急いで云つた。

「あつちへ行つてもいいですか」

「よござんすとも」

ハイディは自分の部屋へ走つて行つて、腰掛にかけ、兩手を組んで、自分の悲しみをすつかり神樣に打ち明けた。そして、どうかおぢいさんのゐる山へ歸らせて下さいと、一生懸命にお願ひした。

それから一週間ばかり經つた頃、先生が、ある注目すべき事柄が起つたので是非御隱居さまのお耳に入れたいと、申し出た。それでおばあさまは部屋に通し、挨拶がすむと云つた。

「さあおかけ下さいまし。どういふお話でせうか。なにかわるいことかお小言ではございませんでせうね」

「どう致しまして」
先生は滔々とはじめた。
「わたくしが全く斷念し切つて居りましたことで、又事情を知るほどの者は何人といへども到底想像だにも及ばなかつたことが、起つたのであります。われわれのひとしく考へて居りましたことから見れば、今回のことは全く奇蹟としか考へられないのでありまして、しかもそれは現に、全く豫期に反したすばらしい現はれ方をしたのでありまして——」
「それではハイディがたうとう讀むことを覺えはじめたのでございますね」
御隱居さまは口をはさんだ。
先生は、口も利けない位びつくして、御隱居さまの顏を見つめてゐたが、やがて又語りはじめた。
「實になんとも不思議です。今までは、いくら骨折つて說明しましても、どうしても覺えられなかつたものが、わたくしが、もう、むつかしい字の起りや意味などは云はないことにして、ただ目の前に並べてやるといふ方法に決めますとすぐ、急にすらすらと覺えはじめたのでございます。今では、まるで夜中に覺えて來るのではないかと思はれます位よく覺え、いきなり、初心者とは思へない位正確にどんどん讀み出すのでございます。全くあり得ない不思議なことでございます」
「世の中には、ずゐ分と不思議なことが起るものでございますね」
御隱居さまはにこにこしながら云つた。
「二つのことが相俟つて、よい結果になることがございますね。今度のことにしても、覺えようとする熱心さと、新しい教授法でございますね。とにかくあの子がそんなによく覺え出したことは、ほんたうに結構なことで、このさきざきも、ずんずん進んで參りませう」
先生が歸ると、御隱居さまは實際にたしかめて見ようと、勉强部屋へ降りて行つた。そこには、まぎれもなく、ハイディがクララのそばに坐つて、大聲で讀んできかせてゐた。ハイディ自身も、自分がこんなに讀めることにびつくりし、字といふものが、見る間にいろんな人間や物や面白いお話やに生まれ變つて動き出し、全く今まで知らなかつた新しい世界が自分の前に展けて來るのに、いよいよ喜びを深めてゐる樣子が、ありありと見

えてゐた。

その晩ハイディが食事につくと、お皿の上に大きな美しい本がのつてゐた。不思議さうにおばあさまの方を見ると、おばあさまはやさしくうなづいて、

「さあ、もうそれはあなたの御本ですよ」

と云つた。

「まあ、わたしの？　ぢや、ずうつと持つてゐていいのですね、おうちへ歸る時でも」

ハイディはうれしくて、顏が眞赤になつた。

「よゝざんすとも、いつまでもあなたのですよ。あしたから讀みはじめませうね」

「でも、おうちへ歸つちやいやよ、ハイディ、いつまでもね」

クララがびつくりして口をはさんだ。

「おばあさまが歸つておしまひになつたら、あたし、とてもさびしくなつちやふんですもの」

ハイディはその夜、お部屋に歸ると、寢る前にもう一度あの繪本を出して眺め入つた。そしてその日から、美しい繪についてゐるお話を何度も何度も讀んで見るのが、何よりの樂しみになつた。晩ごはんの後でみんなが坐つてゐる時、おばあさまから、

「さあハイディ、みんなにお話を讀んで聞かせて頂戴」

と云はれるのが、ハイディにはとてもうれしかつた。もう何の造作もなくすらすらと讀めるし、聲を出して讀んでゐると、その場の有樣が一層はつきりと目の前に浮んで來るし、それに、おばあさまがもつといろいろのことを說明したりお話したりして聞かせて下さるので。

中でもハイディの一等すきな繪は、羊の群れをつれた羊飼ひが、靑々とした牧場のまん中に、杖にもたれて立つてゐる繪であつた。この繪では、この羊飼ひはお父さんの家で羊の番をしながら樂しく暮らしてゐるのだつた。けれどもその次ぎをめくると、この人はお父さんの家を逃げ出して、遠いところで豚の番人にまでおちぶれてゐた。食べるものもろくになく、痩せ衰へて蒼ざめてゐた。ここではお日樣の光りさへ影うすく、なにもかもがぢんよりと霧がかかつてゐるやうに見えた。でもこのお話には、もう一つ、つづきの繪がついてゐた。著物もぼろぼろに、痩せさらばへて疲れ果てた息子が、悔い改めて歸つて來て、おづおづと進み

出るのを、年こつたお父さんが、うれしさうに兩手を擴げながら、抱きよせようこ走つて來るこころである。ハイディはこのお話が大好きで、何度ひこりで聲を出して讀み、おばあさまからお話を聞かせていただいても、決して飽きるここがなかつた。まだこのほかにも、いろいろのお話があつた。かうして毎日お話を讀んだり繪を見たりしてゐるうちに、知らない間に日が經つて、おばあさまのおかへりの日が、だんだん近づいて來た。

十一、よろこびこかなしみ

滯在中おばあさは、クララのお晝寢の時は、いつもそばに坐つてねかしつけてやつた。するこロッテンマイアさんも、多分お晝寢をするのであらう、二階の自分の部屋に引き揚げる。五分も經てばクララは眠つてしまふので、さうするこおばあさまは、今度はハイディをお部屋に呼んで、お話をきかせたり、いろんな面白いここを教へて遊ばせてやるのだつた。おばあさまは美しいお人形をたくさん持つてゐて、ありこあらゆる美しい色の小ぎれを出して來ては、ハイディにお人形に著せる少さな著物や前掛けの縫ひ方を教へてやつた。又おばあさまは、ハイディにお話を讀んで聞かせてもらふのがすきで、ハイディの方では讀めば讀むほごそのお話が面白くなるのだつた。お話の中の人たちの生活に這入り込み、その人たちこ一緒にゐるここがますます樂しくなつて來るのだつた。それでもハイディはまだしんから樂しさうではなく、あの元氣な目の輝きは、もはや見られなかつた。

おばあさまの滯在もあこ一週間こいふある日のここ、お晝ごはんがすむこ、ハイディはいつものやうにご本をかかえて、おばあさまのお部屋へ行つた。おばあさまはハイディをそばに呼び、ご本はわきへのけて、云つた。

「ねえハイディちやん、どうしてそんなに悲しさうにしてゐるのか、わたしにお話してくれませんか。まだいつかの心配ごこが心にかかつてゐるのですか」

ハイディはだまつてこつくりした。

「神樣にお話し申し上げましたね」

「はい」

「毎日神樣に、なにもかもよくして仕合はにして下さいましつて、お祈りしてゐますね」

「いいえ、お祈りはもう止しちやつたんです」
「まあ、ハイディ、そんなことを云ふもんぢやありません。どうして止したのですか」
「だつて、つまんないわ、神樣はちつとも聞いて下さらないのですもの」
ハイディは苦しさうに云つた。
「でも、それは當り前ですわ。フランクフルトには、こんなに澤山の人がゐて、みんなで毎晩一ぢきにお祈りするのですもの、神樣だつて、そんなにみんなのお祈りをお聞きになることは出來ませんわ。だからわたしのお祈りは、きつとまだお聞きになつていらつしやらないのですわ」
「どうしてそんなことをきめてしまつたのですか」
「だつて、毎日毎日おんなじことばかりお祈りしてゐるのに、神樣はちつとも叶へて下さらないのでもの」
「それは間違ひですよ、ハイディ。神樣のことをそんな風に考へてはいけません。神樣はわたしたちみんなのよいお父樣で、わたしたち自身よりももつとよく、わたしたちのためになることを知つてゐて下さるのです。もしわたしたちのためにならないやうなことをお願ひすれば、それは叶へて下さらないで、もつとよいことを授けて下さるのです。ただいつまでも熱心にお祈りを續けて、決して逃げ出したり、疑つたりしてはいけません。神樣はあなたがお願ひしたことは、今叶へてやつてはためにならないとお考へになつたのです。でも神樣は必ずあなたのお祈りはお聞きになつたのですよ。神樣はあなたやわたしの樣な、人間ではないのですから、どんなに大勢の人でも、一ぢきにお聞きになつたり御覽になつたり出來るのです。神樣はきつとかう仰しやつたのでせう。『さうだ、ハイディには願ひを叶へてやるが、ほんたうに仕合せになれるやうに、もう少し時が來るまで待たせておかう。もし今すぐ叶へてやつたら、いつか後悔する時が來る。その時になつてあの子は泣いて云ふだらう。神樣があの時聞いて下さらなければよかつたのに。思つたほどはよくはないのだもの。』つてね。神樣はあなたのことを心配して、お祈りをつづけてゐるか、悲しいことがあれば何でもおすがりして來るかと、いつでも見てゐて下さるのに、それなのにあなたは神樣から逃げ出して、お祈りも止めてしまひ、神樣のことなん

かすつかり忘れてゐるのです。神樣はお祈りを止めた者には、自分でごんなに馬鹿だつたかを悟らせるために、勝手にさせてごらんになります。するとその人はきつと困つてしまひ、『おお神樣、どうかお助け下さい。神樣のほかには誰も助けてくれる人はありません』と叫びます。すると神樣は、『何故わたしから逃げ出したのだ。逃げてゐるから助けてやりたくても助けることが出來なかつたではないか』と仰しやるのですよ。ハイディ、それでもあなたは、こんなにあなたによいことばかり考へてゐて下さる神樣に、御心配をかけたいのですか。神樣にお許しをお願ひして、これからはお祈りをつづけ、何でも神樣におすがりしようとは思ひませんか。神樣はきつと、なにもかもよくして仕合せにして下さいますよ。さうすれば又せんのやうに、氣持が晴れ晴れして、何でもうれしくなりますよ」

ハイディはおばあさまを絶對に信用してゐた。今のお話は、一言一言胸にしみ入つた。

「わたし、今すぐに神樣にあやまつて來ますわ。もう決して神樣のことを忘れたりなんかしませんわ」

「まあいゝ子、それがよござんすよ」

おばあさまはハイディがいぢらしくて、どうにかして元氣づけてやりたいと思つて、又つけ加へた。

「悲しむんぢやありませんよ。神樣はきつと今になにもかもあなたのお願ひを叶へて下さいますからね」

ハイディはお部屋に走つて歸つて、どうかわたしがいつまでも神樣を忘れませんやうに、そして神樣もいつまでもわたしのことを覺えてゐて下さいませと、一生懸命にお祈りした。